

皇學館学園報

第99号
令和6年2月



■注目記事

- 2面 「神祇令」を68年ぶりに発見 神道研究所公開学術シンポジウム 「澤瀉久孝の万葉学とその周辺」
- 3面 【新シリーズ】皇學館宝箱 Vol.1 「徳川家康御内書(折紙)」
- 4面 令和5年度チャレンジプロジェクト実践報告
- 5面 第2回ぐるま座講座「出版社の仕事って…」を開催
- 6面 内定者ボイス
- 7面 中高英語科連携授業を実施
- 8面 皇學館高等学校・中学校卒業生随想
- 古川陸弥さん(教育3)が高校女子卓球部監督に
- 伊東亜里紗さん(中学3年)が青少年読書感想文コンクール三重県審査で優秀賞受賞 ほか

発行・編集 学校法人皇學館 企画部
TEL 0596-22-6496・8600

大 学 大学院 文学部 教育学部
専攻科 現代日本社会学部
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704
TEL 0596-22-0201(代) FAX 0596-27-1704

高等学校・中学校
三重県伊勢市楠部町138
[高校] 〒516-8577 TEL 0596-22-0205(代)
[中学] 〒516-8588 TEL 0596-23-1398(代)

令和6年学長年頭講話

皇學館大学の教育のめざすところ

学修者本位の教育と皇學館大学150教育研究ビジョン

1月11日、記念講堂にて令和6年学長年頭講話が開催された。演題は「皇學館大学の教育のめざすところ——学修者本位の教育と皇學館大学150教育研究ビジョン」。河野訓学長は創立150周年の佳節に向け本学の使命を改めて確認し、高等教育機関としてのあり方、求められる人材像について語った。

建学の精神に示される皇學館教育

「我が国、民族の歴史と伝統を基に、本学の使命を」と



令和6年学長年頭講話が1月11日、記念講堂で行われた。河野訓学長はまず1月1日に発生した能登半島地震で多くの方々が苦しい生活を強いられていることに触れ、「一刻も早い復興をお祈りしたい」とお見舞いの言葉を述べた。続いて、講話のテーマ「皇學館大学の教育のめざすところ——学修者本位の教育と皇學館大学150教育研究ビジョン」に移り、初めに神宮皇學館教育の旨趣、かつ本学の建学の精神を示す賀陽宮邦憲王令旨について説明。冒頭部分の「皇国ノ道義ヲ講ジ、皇国ノ文学ヲ修メ、之ヲ實際ニ運用セシメ、以テ倫常ヲ厚クシ、文明ヲ補ハントスル」を

「何を教えたか」から「何を学び、身に付けることができたのか」への転換

また、河野学長は本学を含め、高等教育機関である大学及び学生に求められている変革について言及した。

文科省は高等教育改革の実現すべき方向性の第一として「学修者本位の教育」を謳っている。背景には、「今後到来する予測困難な時代にあつて、学生たちは卒業後も含めて常に学び続けていかなければならない。学生自身が目標を明確に意識しつつ主体的に学修に取り組むこと、その成果を自ら適切に評価し、さらに必要な学びに踏み出していく自律的な学修者となることが求められる」とある(出典「教学マネジメント指針」(令和2年1月22日中央教育審議会大学分科会)とする社会の要請がある。

「何を教えたか」という供給者側の目線から脱却し、学生が「何を学び、身に付けることができたのか」を実感できる「学修者本位の教育」への転換を促すには、学修成果をエビデンスをもって説明できる仕組みが不可欠だ。そうした仕組みがあつたことにより学生は自身の成長を客観的に把握でき、大学も教育機関として

の力を測り、カリキュラムの改善や質の向上に繋げられる。最後に令旨に改めて触れた河野学長は、主体的・積極的に行動し、学内に留まらず日本、世界を見据え、自身の活動の意義を見出し、自身を高めようとした。

最後に令旨に改めて触れた河野学長は、主体的・積極的に行動し、学内に留まらず日本、世界を見据え、自身の活動の意義を見出し、自身を高めようとした。

皇學館大学150教育研究ビジョン

育成する人間像

①主体的に考え、自ら積極的に行動し、他者と協働できる人材

提供する教育

- ②高度情報化社会を迎えるにあたり、将来学生が社会に求められる人間像を実現できる教育
- ③数理・データサイエンスなどの文理横断・文理融合教育や地域を志向した教育、グローバル人材・デジタル人材の養成

特に推進する研究分野

④本学創立以来の「神宮並びに神道研究」及び「日本古典の研究」に加え、本学への期待が大きい「地域課題の解決を目的とした研究」や「教育学研究」

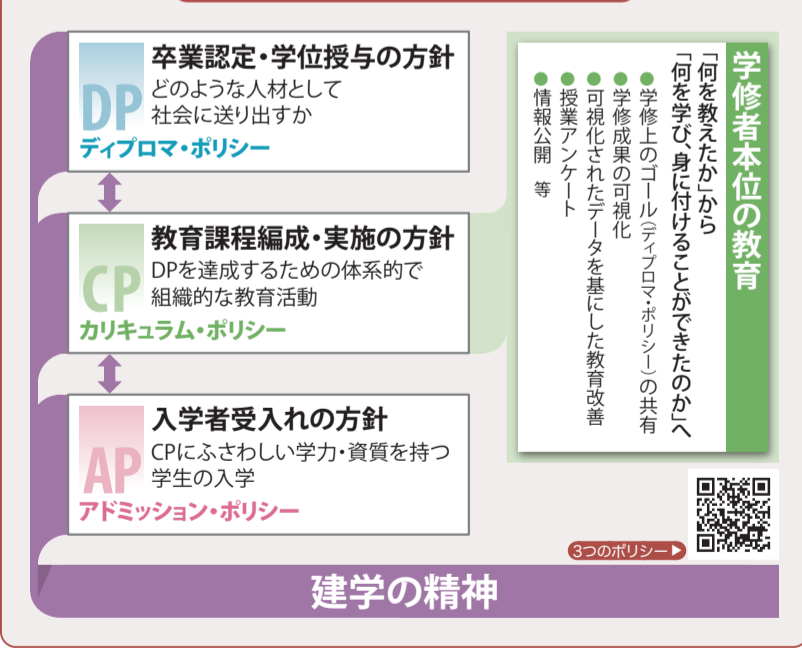
教育の場の拡大

⑤中・高・大接続を推進し、自治体や他大学など多様な主体との連携を図り、学生の学びの場を拡大し、あらゆる人々に学び直しの場を提供

改善活動

⑥中期行動計画を策定し、目標達成に向けた全学的な改善活動を推進すること、また財政基盤の安定及び健全な財政運営を図ること

●教育の充実に向けた取組みのイメージ●



令和6年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」により犠牲となられた皆様に対し深く哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様にご心よりお見舞い申し上げます。学校法人皇學館



杞憂(きゆう)という故事成語がある▼「列子」「天瑞篇」に載る故事で、周の時代の杞の国(現在の河南省開封のあたり)に天の崩れ落ちることを心配して寝食をとらなかつた人がいたということから、無用の心配を意味する▼これとは逆に天は崩れないが、地は崩れるので、「天災は忘れた頃にやってくる」ということになる。この警句は寺田寅彦の言葉として有名だが、警句の形式に調えたのは雪の結晶の研究で知られる高弟・中谷宇吉郎であつたという▼穏やかなはずの元旦の夕刻に発生した令和6年能登半島地震はまさに忘れた頃、どころか想像もしないときのことであつた▼今回の震災報道から受ける印象は倒壊家屋の多いことである。本学園の学生・生徒の安否確認がとれたのは幸いだったが、住居等の被害は免れなかつたという。さらに道路・水道・電気といった社会資本の被害も甚大で復旧には年単位の時間が必要になると見込まれている▼今回の地震は普段からの備えに絶望感すら抱かせる惨状だが、まずは、逃げることに水の準備だけはしたいと思う。関係の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。

「神祇令」を68年ぶりに発見

神道研究所公開学術シンポジウム 「澤瀉久孝の万葉学とその周辺」

令和5年12月16日、「澤瀉久孝の万葉学とその周辺」をテーマに公開シンポジウムを開催した。令和4年度から継続している科学研究費基盤研究(C)「古典籍の蒐集と書写を通してみた澤瀉久孝『万葉学』形成過程の基礎的研究」(課題番号/22K0306、研究代表者/橋本雅之、研究分担者/大島信生・田中康二・齋藤平)の研究成果の一部を発表する場を与えていただいたことをお礼申し上げる。

今回の企画で特筆すべきは、68年間行方分からなかった藤波家旧蔵「神祇令」の卷子本が本学澤瀉久孝文庫に現存していたことの調査報告がなされたことであり、古代律令研究



今回再発見された藤波家旧蔵の「神祇令」を前にして議論する教員。左から岡野教授、遠藤教授、櫻井名誉教授、橋本教授



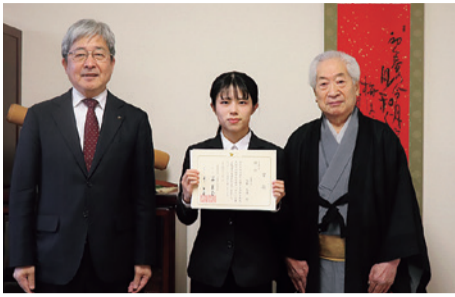
橋本教授が藤波家旧蔵「神祇令」について調査報告をする様子

にとつて貴重な史料が見つかったことは、今後の古代律令研究に一石を投ずるものと言えよう。

研究報告に続いて共同研究者全員が登場してパネルディスカッションを行った。その中で、学術的な課題のみならず、英国に留学した際、日本から畳を取り寄せて下宿生活をしてきたなど澤瀉博士の素顔がわかるエピソードも紹介された。参加者との間で熱心な質疑応答もなされ、シンポジウムは盛会裏に幕を閉じた。

神道学科教授 橋本雅之

学校茶道エッセイで 大藪志保さん(神道4)が佳作



賞状を手に喜びの表情を見せる大藪さん(中央)

茶道裏千家淡交会総本部による令和5年度「第44回 学校茶道エッセイ」で大藪志保さん(神道4)の「茶道の心にふれて」が佳作を受賞した。

茶道を始めたのは大学4年生になってから。エッセイには茶道と神道とに共通する精神性に気付いたことで、より学びが深まった体験を綴った。「茶道では、やり方や手順といった表面的な型ではなく、作法にどのような意味、おもてなしの心が含まれているのかが大事であると教えていただいた。神道の祭式の授業でも、ただ所作や流れを覚えるだけではなく、それらは神様への敬意の表れであり、中身が大切だと学びました」。

過去の受賞者は幼い頃から茶道に関わっている人が多く、習い始めてからまだ日が浅い自分が選ばれるとは思わなかったと驚いた様子の大藪さん。これからも茶道を続けたいと話した。

上小倉教授が日展で入選

第10回日展第5科(書)で上小倉一志教授(国文学科)の作品「李白詩」が入選を果たした。応募総数8822点のうち、入選は1112点。

入選した作品は、縦78センチ、横180センチの大作である。上小倉教授は「近年は、書体の変遷における過渡期の文字をテーマに作品制作をしてきました。今回も隷書の格式を守りつつ、楷書の持つ新しさへの魅力を感じていただろう人々の心の葛藤を表現してみました」と作品に込めた思いを語った。



第10回日展(2023) 李白詩 上小倉横山

学生が能楽を体験

能楽の大鼓奏者で重要無形文化財総合指定保持者である大倉正之助氏が2月6日に来学し、学生に能楽を指導していただいた。これは2月8日、伊勢神宮内宮に能楽を奉納する「飛天双〇能」公演に合わせ、実現したものの。奉納に際し心身を清めるお籠り中であつたが、能楽への理解を深めてほしいとの思いから、特別に体験する機会を設けていただいた。

第1幕は「能楽への誘い」と題し、午前9時より記念講堂で実施された。大倉氏は笛、太鼓、小鼓、大鼓など能楽に用いられる楽器の構造や奏法、(調べ)



記念講堂にて披露された演目「翁」。大鼓を打つ大倉氏(右から2人目)

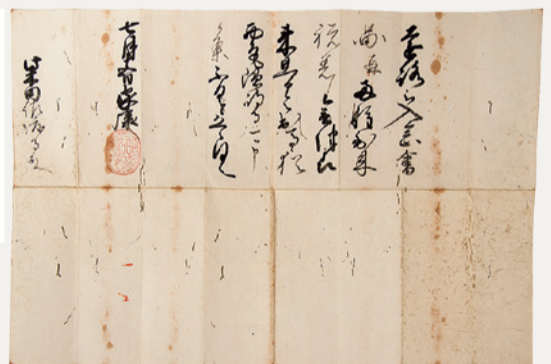
としての音の捉え方、能楽が型を重視する理由などに ついて説明。通常目にすることのない装束の着付けも行われ、学生たちは初めて知る話や光景に興味深げにしていた。また、ご指導いただきながら実際に演目「高砂」を誦い、難しさを体感した学生たち。その後演目「翁」を鑑賞し、本物の芸の迫力に圧倒された様子だった。

第2幕は祭式教室での演奏体験。体験希望の学生約40名が能楽師の方々から指導を受け、小鼓、大鼓、謡、舞を体験し、最後は皆で合わせ「高砂」を演奏した。学生からは「複雑な動きの中に美が宿っていると感じた」「初めての経験で不安だったが呼吸を整え行うことで何とかなることができた」「能の目的の話など気が多かったです。演奏では間の取り方、息の合わせ方が難しかった」といった感想が聞かれた。



祭式教室にて演奏体験をする学生たち

徳川家康御内書(折紙)



遠路被入念、會
図并兩種到来、
祝着候、会津表
来廿一日出馬候猶
西尾隠岐守可申
候条、不具候、恐々謹言
(慶長五年)
七月十五日 家康(朱印)
柴田佐渡守殿

皇學館は明治15年(1882)、神宮祭主久邇宮朝彦親王の令達により設置された教育・研究機関で、創立当初より神道・国文・国史を根幹に据えていたため、古文書収集にも積極的であつたが、昭和21年(1946)、敗戦による神道指令で廃絶の憂き目に遭い、それまでに収集された神宮

皇學館大學所蔵の古文書類は、名古屋大學附屬図書館に移管されてしまつた。しかるに昭和37年(1962)、皇學館大學は私立大學として再興され、本年で再興62年を数える。その間本學では、附屬図書館や文學部国史学科研究室をはじめ、研究開発推進センター神道研究所・史料編纂所・佐川記念神道博物館などがそれぞれ古文書収集に努め、質・量ともに貴重な史料群を形成するに至つた。本コーナーではその一部を紹介していくことにしたい。

今回ご紹介するのは皇學館大學研究開発推進センター史料編纂所所蔵「徳川家康御内書」。会津表、来る廿一日出馬せしめ候」とあることから、慶長5年(1600)7月15日、会津攻めのため江戸城にいた家康から越後の柴田(新発田)氏宛に発せられた礼状と推定できる。この後、家康は7月21日に江戸を立ち、下野国小山に向かうが、それより前の7月17日に石田三成が挙兵、8月1日に伏見城を攻め落としたため、小山にいた家康は江戸に兵を返し、9月15日には関ヶ原で兩軍が激突することとなる。「天下分け目」の戦いを目前にした「どうする家康」の一品である。

国史学科教授 岡野友彦

陪宋中丞武昌
夜飲懷古
清景南樓夜
風流在武昌
庾公愛秋月
乘興坐胡床
龍笛吟寒水
天河落曉霜
我心還不淺
懷古醉餘觴

清らかな景色の南樓の夜、風流はなるほど武昌に在る。むかし晉の庾亮は秋月を愛し、興に乗じ椅子に掛けて部下と語りあかしたと云ふ。今や夜ふけて笛の音が寒々とした水の面に響きわたり、天の河から曉の霜が降って来る。我が心もやはり興淺からず、古へ懐ひつつ餘りの酒に酔を重ねる。

(出典「漢詩大系」)

交流の場々を作り学内を活性化

令和5年度チャレンジプロジェクト実践報告

大学全体の活力向上に寄与することをめざし、「学内活性化」と「地域連携」に向けた学生の活動を大学がサポートするチャレンジプロジェクト。令和5年度に採択された4件のうち、今号では「めっちゃええ(e)スポーツ大会」「皇學館ULCプロジェクト」大学の魅力再発見」を紹介する。

めっちゃええ(e)スポーツ大会

新たなeスポーツの機会を提供

eスポーツとソフトバレーボールを組み合わせた「めっちゃええ(e)スポーツ大会」が12月23日に開催され、学生およそ70名が参加し

学内活性化 めっちゃええ(e)スポーツ大会

佐藤 武尊 准教授 | 長谷 亮佑 (教育4)

本学の学生・教員にスポーツ活動の機会を提供することで、皆さんの健康で明朗な大学生生活の充実を図ることを目的とする。総合優勝をかけて熱戦を繰り広げ学内の活性化を図っていききたい。

また、参加者に学生食堂の食券を配布し、学生食堂の利用を促進することで、食の観点からも参加者の活力・健康増進に繋げる効果を狙っていく。



「イベントを通して友人の新たな一面を知った学生も多いはず」と話す長谷さん(右端)



白熱したソフトバレー大会

実際に体を動かすスポーツと掛け合わせた面白いイベントになるのでは」とアイデアを思い付いたきっかけを話す。

eスポーツとは「エレクトロニック・スポーツ」の略。長谷さんは「ゲーム全般を指すのではなく、

皇學館ULCプロジェクト

展示を通じた知的交流が活発に

勝敗を競う競技性を含むもの」と定義し、ゲームメーカー・セガの人気アクションパズルゲームを記念講堂で行った。

パズルゲームを採用した理由について、長谷さんは「初心者でもチャレンジしやすく、高齢者の認知機能低下予防にも効果があるとの研究データも発表されている」と話した。参加希望者が中々集まらなかったり、当日画面が映らないトラブルが発生したりと苦労した

そうだが、「めっちゃ楽しかったという感想を聞いて、大変だったけれど開催してよかった」と顔をほころばせた。体育館で実施されたソフトバレーも盛り上がり、学内活性化に一役買った同プロジェクト。長谷さんは今後の改善点として「プレーヤー以外の人が退屈しない工夫や倉庫祭と絡められたら」と話し、「継続してもらえたら嬉しい」と希望を語った。

「皇學館ULCプロジェクト」は University・Library・Curatorの頭文字を取ったもので、講義や科研、大学史編纂などと連携した展示を図書館で展開することを通じて学修を深めると共に図書館の活用を促進し、さらに皇學館への関心を高めるなど、さまざまな効果を狙ったプロジェクトである。当初3名だったメンバーは徐々に増えて7名となり、期間中に「大正時代の伊勢と皇學館」「国史を継ぐもの」「古代の歴史書と近代の史料編纂」「ふみくら倶楽部×皇學館

大学ULC連携展示 蓄音機で聞くレコード」等、7件のミニ展示を行った。授業との連携企画では担当教員による解説が行われたほか、関連する書籍を特別配架するなど、展示が新たな学びや読書体験につながる場として機能した。

学生・教職員の誰もが自由に利用できる図書館を主な舞台としたことで発信効果も高かったようだ。

参加メンバーのひとり、山本謙利さん(国史3)は「櫃原神宮で行っている展示活動を学内でも実行することで、大学の魅力を学生に

スクールバスの寄贈

令和4年度卒業生・萼の会(保護者会)



令和4年度卒業生及び萼の会からスクールバスを寄贈していただいた。従来のスクールバスは老朽化が進んでおり、喫緊の課題となっていた。新しいスクールバスは定員が計79人。本学から宇治山田駅までの夜間時間帯における運行を予定しており(授業実施日のみ)、各種行事やイベント時での利用も見込まれる。学生の皆さんにより安心、快適な通学環境を提供できるといえよう。ご寄贈いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

鈴木健一伊勢市長が「伊勢志摩共生学」講義

伊勢市の鈴木健一市長が1月18日、本学記念講堂で「伊勢志摩共生学」の講義を行った。



鈴木市長は初めに民間の会社員時代の苦労など、ユーモアを交えて自身の経歴を紹介。また、平成28年に開催されたG7伊勢志摩サミットに触れ、故安倍晋三氏から直接伺った話として、ドイツのメルケル首相が「神宮を参拝した中で、日本人の心の強さと柔らかさがよくわかった」と語っていたエピソードを披露した。

続いて、伊勢市が力を注いでいる政策について説明。その一つ、「クリエイターズ・ワーケーション促進事業」は国内在住の文化・芸術分野のプロのクリエイターを伊勢市に招聘し、宿泊しながら創作活動に取り組んでもらおうというもの。同事業には演出家の宮本亞門氏をはじめ様々な分野の最前線で活躍しているクリエイターからの応募が相次ぎ、注目を集めた。

ほか、防災対策や観光産業の高付加価値化、「伊勢わいん特区」の認定、学校における読書推進活動など多岐にわたる取組みを解説した鈴木市長。レスポンスを使った質疑応答では伊勢市駅前の開発に関心を示す学生が多かったことから、宿泊施設の誘致に至った経緯等が語られた。また、まちづくりについて学生から直接意見を吸い上げる機会を持ってほしいと話した。

第63期 学友会が発足

第63期学友会が発足し、小西嘉宏さんが総務委員長に就任した。小西さんは「学生からの意見や要望をもとに、コロナ禍前の大学生生活を取り戻すため、さらなる学友会活動の活性化にまい進したい。また、学生と相互のコミュニケーションを通じて身近な学友会総務部をめざしたい」と抱負を語った。

第63期 学友会総務部員

総務委員長	小西 嘉宏(国史1)
総務副委員長	布藤 綾乃(神道2)
庶務委員※会計兼任	山口 真凜(教育2)
庶務委員	瀬戸口 未来(国文2)
庶務委員	長谷川 怜哉(教育1)
庶務委員	古川 奏彩良(現日1)
庶務委員	水谷 瞳人(現日1)
庶務委員	森 よしき(現日1)



史料の陳列作業を行うメンバー

知ってほしいと思った」とプロジェクトに参加した理由を語る。活動内容については「キャプションや展示パネルの作成、展示物の配置など自分たちが一から考えたこ

とで魅力的な企画の見せ方やデザインといった実践力を養えた」と言い、「展示技術は運動と同様に常に実践を繰り返していかないと退化してしまう。継続的な展示の場はトレーニングの機会になるだけでなく、展示の面白さや学芸員の魅力を伝える場にもなる」と話した。長谷川准教授は「メンバーは一連の活動で得た知見・経験を三重や岐阜、東京など県外の展示や講座でも生かしている。学内外を問わず皇學館の学生が活躍する場があるのは大変喜ばしいことであり、本プロジェクトはそのためのプラットフォームとして機能したといえる」と同プロジェクトの成果を語った。

学内活性化 皇學館ULCプロジェクト～大学の魅力再発見～

長谷川 怜准教授 | 山本 謙利(国史3)

本プロジェクトは図書館を主な舞台とし、学生による小規模展示を複数展開することを通じて学修の定着や愛校心の涵養などをめざすものである。具体的な展示テーマの検討はプロジェクトの採用直後に開始し、夏季休暇中に解説執筆やパネルデザインなどを行う。秋学期の開始後に実際の陳列作業に取り掛かる。構成員は数名のチームに分かれて複数の展示準備を同時並行で進め、順次展示を実施していく。また、適宜教員等から展示企画実施の依頼を受注する。1回の展示期間はおよそ10日～3週間を予定し、期間中に5～7つ程度の企画を実施する予定である。



「展示技術が身に付くだけでなく、本物に触れる機会があることもプロジェクトの魅力」と話す山本さん(写真左)

第2回くるま座講座「出版社の仕事って…」を開催

第2回くるま座講座「出版社の仕事って…」が12月1日、図書館ラーニングコモンズで開催された。株式会社平凡社代表取締役会長・下中美都さん、柏書房株式会社代表取締役社長・富澤凡子さんを講師に迎え開かれた同講座は図書館を中心に活動する学生ボランティアグループ「ふみくら倶楽部」が企画。出版社、本づくりにまつわる話から業界の今後まで、貴重な話に参加者は熱心に耳を傾けていた。

「自分の書棚を作って」



お互いを同志と語る下中さん(右)と富澤さん(左)

百科事典の出版で知られる平凡社は大正3年(1914)創業の老舗。創業者の下中弥三郎は下中さんの祖父にあたる。下中さんは慶應義塾大学を卒業後、文化出版局で17年にわたり料理本や雑誌の編集を手掛け、平凡社に入社。創業100周年となる平成26年(2014)に第6代社長に就任し、令和5年6月に会長職に就くまで舵取りを担ってきた。

下中さんは「本よりいいものはないと信じている」と話し、紙の本というのは、1000年堅牢に、知恵を伝えるようになってきている。いろいろな時

代にいろいろな角度から光を当てても価値のあるように、心を込めて作っている」と本づくりにかける思いを語った。また、数少ない女性経営者として奮闘した日々を「解決できないようなことばかりに遭遇した。でも、止まない雨は

古文書関連書籍を長く扱ってきた柏書房は昭和45年(1970)創業。現在、第6代社長を務める富澤さんは編集者として同社に6年間在職するも、書店を巡る中で本を売る魅力に目覚め、退職。いくつかの出版社を営業職で渡り歩いた後、当時の同社社長から戻ってきてほしいと声が掛かり、再び入社した経歴を持つ。

冒頭で「何度生まれ変わっても、この仕事を選ぶ」と言い切った富澤さん。講座では古文書の説明や稀少な複製史料を借りる際には万が一にも破損することのないよう、「スリッパに緩衝材を詰め、プレッシャーに潰されそ

うになりながら会社に帰って帰る」など現場の苦労が語られた。また、「競合他社とライバルでありながら同志という不思議な関係を築けるのが出版営業の面白さ」と語り、タッグを組んで書店にフェアを仕掛けるといった仕事の一端を紹介した。

ほか、大型書店の先駆けであった「八重洲ブックセンター本店」や「MARUZEN&ジュンク堂書店渋谷店」の閉店および、第一線で活躍している出版者のうち、ほぼ半分は社員が10人以下であること、独立系書店が増えている等、業界の現状や動向についても話題が及び、第一線で活躍しているお二人から生の声が聞ける有意義なひとときとなった。以下に参加者の感想を抜粋して紹介する。

参加者の感想

- 今回の機会がなければ知ることのできなかった出版社の仕事、楽しさを学ぶことができた。
- 講座内容が興味深かったことに加え、ふみくら倶楽部の皆さんが一致団結して講座を盛り上げようとする姿に心引かれた。
- お二方の話を通して自分の内から発する言葉で丁寧に話すこと、自分軸を持つ大切を改めて感じた。
- 何気なく手に取っていた本にはたくさんの人の思いが詰まっており、自分と本との出会いはその人たちの縁ができることだと感じた。
- 何がしたいのかわからず悩んだり行き詰まったりした時こそ本に触れようと思う。
- 本を作る上でたくさんの人が関わっていること、コミュニケーションが要であることなどを知ることができ興味深かった。
- 出版社の現状や本を取り巻く環境を改めて知ることができた。
- 出版業界のことだけでなく、就職活動や今後の人生にも生かせることを教えていただき嬉しかった。「本は二度と同じように読めない」「あなたはあなたでいい」という言葉が心に残った。
- 想像以上に愛と熱量を持ってお仕事をしていることが伝わってきた。私も「生まれ変わってもまたこの仕事を選ぶだろう」と思える天職に就きたいと思った。

寺田夏生監督が一日警察署長に

「110番の日」の1月10日、アピタ松阪三雲店で行われた警察広報イベントに駅伝競走部の寺田夏生監督が一日警察署長として登場。県警音楽隊員や松阪署員とともに正しい110番通報の仕方や特殊詐欺・交通事故の防止を呼び掛けた。



模範通報役となり、110番をかけた寺田監督。初めての経験で不安があったそうだが、「警察の通信司令室の方が丁寧に質問してくださったので場所や盗られたものなど状況を上手く説明できたと思う」と話した。

一方で、緊急性のない通報が全体の15%を占めると知り、「適切な110番通報を心掛けたい」とも。さらに、スマートフォンやタブレット端末で撮影した写真や映像を送信できる「110番映像通報システム」の存在を初めて知ったと言い、「音声だけでは把握が難しい事件や事故に遭遇した場合、活用できるのでは」と話した。

新企画を織り交ぜ 就活支援イベントを開催



3月1日から本格化する就職活動に向けて、本学では就職担当主催の多彩なイベントが開催された。



1月24日には警察官に内定した4年生7名を迎えての個別相談会を実施し、警察官志望の3年生11名が参加。それぞれのグループで先輩たちに次々と質問する様子が見られた。筆記試験の質問に対しては「数的処理に力を入れて取り組んだが、歴史に関する問題など文系の設問も多くあり、思うように点数が取れなかった」など、詳細な試験内容が語られた。面接については「就職担当が実施する面接練習をやっていれば大丈夫」との回答が多く聞かれ、多くの警察本部と情報交換をしている就職担当の支援が成果を上げていることが伺えた。実際に採用試験を経験し合格を勝ち取った先輩たちのリアルな声に、後輩たちはじっと耳を傾け、熱心にメモを取っていた。

2月1日は「皇大OB・OG人事担当在籍企業限定研究会」を開催。卒業生が人事担当として勤務している9社と接点を作る貴重な機会となった。翌2日には「鈴鹿エリア企業・団体研究会」を鈴鹿市役所と共催で開いた。続けて、5日は「IT業界セミナー」を開講。近年IT業界への就職が増えているが、一口にITといっても多種多様だ。セミナーでは(株)キートン代表取締役の松田勝好氏を講師に迎え、業務内容や実際の仕事の特徴など基本的な事柄を語っていただいた。

いずれも新企画として今年度初開催。就職担当では今後も多彩な催しを企画し、学生を全面的にサポートしていく。

Global グローバル



より国際的、総合的な大学をめざす一環として訪日したと話す副学長一行

の完成は新しい時代に向けた土台になると話した。2つ目は張鎮江氏の新学長就任だ。近年、中国で秀な留学生に、日本人学生も大いに刺激を受けていると話した。後半には河南大学の留学生たちも加わり、会話は終始和やかな雰囲気

河南大学副学長一行による表敬

本学は中国河南省に位置する河南大学と平成15年に「友好交流覚書」を交わし、平成19年より留学生を受け入れている。これまで河南大学、河南師範大学を併せ約100名が本学で学んでおり、卒業生は名門大学院への進学、大企業への就職、起業するなどして活躍している。

令和5年12月20日、本学は河南大学の孫君健副学長をはじめとする5名の表敬訪問を受け、今後も連携を密にし、相互に発展していく旨を再確認した。

孫副学長は挨拶の中で河南大学における3つの変化を紹介した。1つは研究棟の新設である。施設の完成は新しい時代に向けた土台になると話した。2つ目は張鎮江氏の新学長就任だ。近年、中国で秀な留学生に、日本人学生も大いに刺激を受けていると話した。後半には河南大学の留学生たちも加わり、会話は終始和やかな雰囲気



孫副学長(前列中央)一行と記念撮影

内定者ボイス

教職、公務員、神職の内定を獲得した先輩たちの声を紹介します。

- ① 大学で得た学び
- ② 工夫したこと、成功の秘訣
- ③ 先輩へのアドバイス

教職編

山本 陽菜(国文)

【内定先】中学校(国語)
(和歌山県)



① 古典や現代、漢文などいろいろな時代の文学を専門的に学ぶことができた。教育実習で短歌の技法を教えた際、生徒に「楽しかった」と言ってもらえたことが自信になり、国文学科での学びが生かされた実感した。② 5年分の和歌山県の問題集を3回繰り返し、考え方を定着させた。倉志会で同じ目標を持つ仲間と切磋琢磨し、不安になったときも支えてもらった。③ 大学生活でいろいろな経験をすることが大事。初めての経験は誰しも不安だが、克服することで自信が付き、自身の幅、視野が広がる。

伊東 若葉(教育)

【内定先】中学校(保健体育)
(三重県)



① マット運動や柔道、砲丸投げ、バレーボールなど専門性の高い先生方に実技を指導していただいたおかげで苦手な試験種目をこなせるようになり、実践力を養うことができた。ゼミの先生の人を引継ぎ付ける話や熱のこもった話し方が勉強になった。② 小学校教員をめざす友人と一緒に勉強したこと、模擬授業のやり方、導入の工夫など参考になった。実際、ダンスの授業の試験で盛り上げることができた。また、教員になることを見据え、ハンドボールの審判資格を取得した。講習では小中高を訪れる機会があり、現場の先生方の話を聞くことができた。③ 手厚いサポート体制が整っていることで何でも相談しよう。

ど専門性の高い先生方に実技を指導していただいたおかげで苦手な試験種目をこなせるようになり、実践力を養うことができた。ゼミの先生の人を引継ぎ付ける話や熱のこもった話し方が勉強になった。② 小学校教員をめざす友人と一緒に勉強したこと、模擬授業のやり方、導入の工夫など参考になった。実際、ダンスの授業の試験で盛り上げることができた。また、教員になることを見据え、ハンドボールの審判資格を取得した。講習では小中高を訪れる機会があり、現場の先生方の話を聞くことができた。③ 手厚いサポート体制が整っていることで何でも相談しよう。

吉村 美咲(国文)

【内定先】小学校(川崎市)



① 豊住先生のゼミで英語教育学を学んだことで、「英語の授業ができる小学校の先生」という自分の理想の教師像に近づけた。小学校教育アシスタントボランティアと塾で

のアルバイト経験が教育実習や教採試験で非常に役立った。② 川崎市の求める教師像が自分の考えと重なるため志望したが、川崎市とは繋がりがなかったため、受験前に旅行を兼ねて川崎市を訪れ、感じた魅力を面接で伝えられるようにした。百船で同じ志の仲間と集中して勉強に励むことができた。教職支援担当のサポートを1年生から活用した。3年生の10月頃からは毎日通った。③ 教育学部以外で教採の受験を考えている人は教職教養を早めに始めた方がよい。

のアルバイト経験が教育実習や教採試験で非常に役立った。② 川崎市の求める教師像が自分の考えと重なるため志望したが、川崎市とは繋がりがなかったため、受験前に旅行を兼ねて川崎市を訪れ、感じた魅力を面接で伝えられるようにした。百船で同じ志の仲間と集中して勉強に励むことができた。教職支援担当のサポートを1年生から活用した。3年生の10月頃からは毎日通った。③ 教育学部以外で教採の受験を考えている人は教職教養を早めに始めた方がよい。

中村 祐也(国史)

【内定先】小学校(三重県)



① 授業ではどの課題も他者と協力する必要がある。サークルやアルバイト、ボランティア活動でも多くの人と関わったことで社会性が身に付き、互いに尊重し合いながらみんなで成し遂げる良さを学んだ。② 漫然と勉強するのではなく、自分が理解しているところ、不足している部分など現状をしっかりと把握し先を見

据えて取り組んだ。頑張ってもなかなか点数が上がらないときは友人と慰め合ったり、何もしない日を作ったりして、オンとオフの切り替えをきっちりした。③ 教職支援担当に相談しよう。自分がその時にやれることはやり切ろう。

本田 光里(教育)

【内定先】幼稚園教諭(保育士)
(松阪市)



① ゼミや授業を通して幼保職に必要な知識を蓄えられた。特に実習では礼儀を含め社会人に求められる力を養うことができた。子育て支援活動「び

よびよ」での経験を通して実践力が身に付いた。② 教職支援担当にある先輩方の報告書がとても参考になった。モチベーションを保てるよう友人と一緒に勉強したり自分の集中できる環境を見つけ

公務員編

林 大遥(国文)

【内定先】いなべ市役所



① 英語で司会を務める授業を通して臨機応変に対応する力や時間管理術、考える力を得た。卒業論文を進める中で目的に沿って遂行する力や正しい

て自習したりした。③ 公立、私立など、進路の方向性は早めに決めておいた方がよい。明確であるほど実習先に迷うことなく、参加すべきガイダンスや講座を把握できる。

言葉遣い等を学んだ。

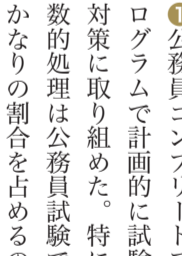
② 就職担当が主催している模試や大原学園のウェーブ講座に申し込み、授業とセットの教材に何度も取り組んだ。就職支援室で面接練習を繰り返して力をつけた。③ SDGs

① 英語で司会を務める授業を通して臨機応変に対応する力や時間管理術、考える力を得た。卒業論文を進める中で目的に沿って遂行する力や正しい

バランスを実現しやすいと思ったのが志望理由だった。踏み込んだ情報を入手するためにも、説明会には必ず足を運ぼう。

羽木 司(現日)

【内定先】桑名市役所



① 公務員コンプリートプログラムで計画的に試験対策に取り組めた。特に数的処理は公務員試験でかなりの割合を占めるので段階的に学べた点は大きかった。② 大事な時期に入院することになり焦ったが、不安な時は就職担当に行き相談した。いつも適切なアドバイスを

くれるので、気持ちを切り替えることができた。③ 公務員コンプリートプログラムは1年生になつてすぐ始まるので、計画的に取り組もう。インタビュー

神職編

佐藤 京香(神道)

【内定先】大崎八幡宮(宮城県)



① 学科の学びはすべて役立つ。特に1、2年生で履修する神職課程必修科目は基本といえる。② 祭式研究部で先輩方から教えていただき、丁寧かつ綺麗な祭式の作法を日々練習した。倉陵祭等で祭

ーンシツプや企業説明会などがあると時間的な余裕がなくなる。自分が進みたい職種に必要な資格を調べ、なるべく取得しておくべきだと思う。

典を奉仕したため、実践力になり得る点をアピールできた。神社に残る貴重な史料を適切に扱えるように、博物館学芸員課程を履修した。③ 神社界は求人票の発表がGW以降と他職種より遅く不安に感じると思うが、焦らず初歩的な祭式作法やどの神社にも必要な知識の復習をすると良い。先輩方の奉職活動報告書も非常に参考になった。

神社実習報告

現場で活用する意識を持って学ぶ

広島県・速谷神社 神道学科3年 網岡 茉弥



元々日本の文化や歴史が好きだったことから、日本文化の根源である神道を学び、それを実践し継承していく立場の人になりたいと考え神職を志すようになりました。

実習では境内掃除、神符守札授与・補充、祈祷、祭典奉仕などをさせていただきました。今までは目の前のやるべきこと、精いつばいでしたが、今回は境内の状況を把握したり、周囲と必要な連携を図ったりと、広い視野を持って取り組めたように思います。また、参拝の方から

「女性の神職さんいらっしゃいます」と声を掛けられた。元々日本の文化や歴史が好きだったことから、日本文化の根源である神道を学び、それを実践し継承していく立場の人になりたいと考え神職を志すようになりました。

毎日自分で狩衣を着るだけでなく、宮司様の装束の著装をお手伝いすることもあったので、授業や雅楽部で着付けやその際の作法、礼儀を学んでおいてよかったです。今回の経験をを通して、単に知識を増やしたり漫然と稽古に励んだりするのではなく、実際に現場で活用する意識を強く持つて学ぶことが大切だと気付きました。さらに、得た学びをさまざまな視点から見つめることができるようにしたいと思っています。

自発的な行動が大事

京都府・賀茂別雷神社(上賀茂神社) 神道学科2年 尾崎 恵太



父の仕事を手伝う中で、父が氏子の方たちと共に地域の神様を守っている姿を見て、「私も神職になりたい。神と人を結ぶ中執持になりたい」と感じたからです。

今回実習先となった賀茂別雷神社は、境内全域が世界遺産であり「古都京都の文化財」にも選ばれており、非常に美しい神社です。実習では年末年始の準備や授与所での御守り等の頒布をお手伝いさせていただきました。その中で御参拝の方から質問された時、答えることができたのは、

私が神職をめぐって学んできたことについて学んでいただく機会をもちたいです。神職の方々と話す機会も多く、賀茂別雷神社の歴史や独自の神饌、神職の心構えなどについても詳しく教えていただきました。その中で気が付いたのは、何事も率先して自発的な行動が大事ということです。

近年、氏子の数が減少していることで、神社の存続が危ういとの事例をよく耳にします。しかし、氏子をはじめ地域の方たちが心を寄せる場所がなくなるというのは大変深刻な問題だと感じています。今回の実習で学んだことを生かし、よりよい神職、中執持をめざして日々精進していきたいと思っています。

私が神職をめぐって学んできたことについて学んでいただく機会をもちたいです。神職の方々と話す機会も多く、賀茂別雷神社の歴史や独自の神饌、神職の心構えなどについても詳しく教えていただきました。その中で気が付いたのは、何事も率先して自発的な行動が大事ということです。

近年、氏子の数が減少していることで、神社の存続が危ういとの事例をよく耳にします。しかし、氏子をはじめ地域の方たちが心を寄せる場所がなくなるというのは大変深刻な問題だと感じています。今回の実習で学んだことを生かし、よりよい神職、中執持をめざして日々精進していきたいと思っています。

12月11日に高中全学年で人権学習

相手の立場を想像する大切さ

皇學館高等学校 教育相談部・人権教育担当 宮岸良次

1年生は「SNSと人権」をテーマに、SNS上のトラブルに対して、加害者にも被害者にもならないための方法を意見交換し、SNSとのより良い付き合い方について考えた。

2年生のテーマは「災害と人権」。災害時においてすべての人々の人権が守られるために必要な支援を考え、互いの人権を尊重できる

ように、それぞれのグループで話し合った。

3年生は「今までの人権学習の振り返りと今後に向けて～想像力を働かせて～」とのテーマでこれまでの人権学習を振り返り、「自分の言動に責任を持ち、相手の立場に立って想像力を働かせること」の大切さを確認した。3年間を振り返る貴重な機会になったようだ。

正しい知識の理解が差別をなくす

皇學館中学校 人権教育係 小林 晃

1年生は「いいところさがし」、2年生は「部落差別問題学習、今も消えない部落差別、ネット上で起きる部落差別問題」、3年生は「多様な性とはなんだろう？—誰もが自分らしく安心して暮らせる社会に—」のテーマで学習した。

1年生の「この友人はだれだ？クイズ」では、友人が書いた5つほどのいい点をパワーポイントで表示し、出されたヒントをもとに誰かを考え班で発表した。また、友人が書いた各個人の「いいところ集」を配布。読んで、うれしそうに顔を赤らせた生徒がたくさんいた。副担任も冊子を生徒からもらい、生徒と同じように笑顔になっていた。温かい雰囲気の中、この学習を通じ、自分自身を大切にす

ことは、友人も大切にすることだと学んだと思う。

2年生は部落差別について、新聞記事等の教材をもとに学習した。部落差別の歴史を学び、正しい知識を身に付けたことで、部落差別は不合理に作られたものであることや、未だに残る差別は間違った意識や偏見から生じていることが理解できたと思う。さらに、差別や偏見を見抜き許さない態度と、それを指摘できる実践力がついたのではないと思う。

3年生はLGBTQについて学習した。この学習で、「自分らしさ」の違いを認めるとともに、誰もが「自分らしく」安心して暮らしていける社会のありかたを考え、行動できるようにするための学習を通じ、自分自身を大切にす

新校友会役員が抱負

令和5年7月7日に皇學館高等学校で第61回校友会（生徒会）本部役員立会演説会と選挙が行われ、次の3名が選ばれた。以下に3名の抱負を掲載する。



左から岡本さん、山中さん、飯田さん

皆さんの意見を一つでも多く実現 総務委員長 山中 美璃依(2年10組)

私の抱負は生徒の皆さんの意見を一つでも多く実現していくことです。様々なことが元通りになりつつある今だからこそ、皆さんがやりたいこと、改善してほしいことを叶えるのが我々の務めだと思います。また日々活動する中で「お疲れ様!」「ありがとう!」と声をかけてくれる方がいてとても嬉しいです。たくさんの期待に応えられるよう日々努めていきたいです。

トライアンドエラーの精神で挑戦 総務副委員長 飯田 育也(2年7組)

私は良い意味で「今年の校友会は何かが違う」と思われるような校友会にしていきたいです。そのために、従来の仕事だけでなく、常に新しいことに取り組み続けていきたいと考えています。失敗に怯えず、トライアンドエラーの精神で要望の実現に向けてひたむきに挑戦を続ける、そんな志を持ちながら仲間とともに仕事に向き合っていきたいと思っています。

意見を出しやすい環境に 総務副委員長 岡本 兼成(2年7組)

校友会のメンバーたちと協力して皆さんの意見をより取り入れていきたいというのが私の抱負です。具体的には、皇高祭や体育大会、クラスマッチのときなど校友会が発信する行事でChromebookを活用し、ClassiやClassroomなどでアンケートや、意見を書き込める場所を作るなどして、今までにはなかった方法でよりみなさんの意見を出しやすい環境にしていきたいです。

令和6年1月22日にセミナーホールにて全校集会が行われ、新校友会本部役員が挨拶した。



写真は、前列左から黒田さん、三島さん、若林さん、後列左から石井さん、小林さん

総務委員長 三島 香里奈(2年A組)

「新校友会本部役員で、皇學館中学校での生活をより良いものにしていきます」

総務副委員長 黒田 若奈(2年A組)

「校友会本部役員で、皇學館中学校をより良くしていきたいです」

総務副委員長 若林 京汰(2年A組)

「皇學館中学校を、しっかりと支え、楽しい学校にしていきたいです」

書記 石井 佑吾(1年A組)

「先輩方と共に、校友会活動を頑張ります」

会計 小林 なな子(1年A組)

「未熟者ではありますが、精いっぱい努めさせていただきます」

すべてのクラスが一致団結

スポーツフェスティバル

12月19日、クラス対抗スポーツフェスティバルをサッカー・ソフトバレーボール・バドミントンの3種目で行った。学年の枠を超えた、総獲得ポイントによる対抗戦。各種目2試合ずつ行い、それぞれの試合に付けられたポイントを得る。合計ポイントが最も高いクラスが優勝だ。どの種目でも熱戦が繰り広げられ、すべてのクラスが一致団結できた。

選手だけでなく、応援も白熱

校友会総務副委員長 岡本 兼成(2年7組)

今年のスポーツフェスティバルは、バレー、バドミントン、サッカーの3つに分かれて行いました。本番までの体育の授業時間に、クラスが勝てるようにみんなでアドバイスし合ったり、励まし合ったりしながら取り組んできました。私はバレーに出場しましたが、選手はみんな一生懸命プレーし、全体が盛り上がりとても楽しかったです。自分の試合が終わってから、サッカーの試合を観戦しに行きましたが、私たちのクラスは特進同士で対戦をしたので、選手だけでなく応援している人も白熱していました。3年生の人たちはクラス全体で



最後の行事ということもあり、一人ひとりの迫力が凄く、紳士的に取り組んでいる姿を見て、私も先輩方のようになれるように、日々精進していきたいと思いました。それぞれのクラブの人たちが中心となって、審判や運営を行ってくれ、スムーズに終わることができました。

中高英語科連携授業を実施

国際理解教育における学びを深めようと、本校が令和5年度に実施した中高英語科連携授業を2つ紹介する。英語科 小林誠治

① フェリペ先生によるフランス語講座×調理実習

12月13日に、高校に在籍するフェリペ先生によるフランス語講座が3年生を対象として行われた。今回は家庭の調理実習とコラボして実施。簡単な挨拶表現をはじめ、お菓子作りの材料やレシピをフランス語で学び、グループに分かれてヨーグルトケーキを作った。ケーキを焼いている間にはフランス語の数字や色の言い方を教えてもらうなど、2時間たっぷりフランス語と、おいしいヨーグルトケーキを楽しんだ生徒たちであった。



生徒の感想

- 「クロワッサン」のように日本でも使用されている単語でも発音が全く違って、とても楽しい授業だった。
- これまで英語以外の言語に触れることがなかなかなく、フランス語を使いながらの調理実習をとても楽しみにしていた。調理実習中はフェリペ先生とジェスチャーを使いながら会話でき、とても楽しく活動できた。グループのみんなと協力しながら作ったヨーグルトケーキはとてもおいしかった。
- ケーキのレシピをもらったので、家族とフランス語のみで作ってみたい。
- この機会をきっかけに、他国の言語について深く学んでみたいと思った。

② ドイツからの高校留学生と交流

12月11日・13日の2日間、皇學館高等学校1年に在籍していた(12月下旬に帰国)ドイツからの留学生島田莉彩さんと3年生による交流授業を実施した。本紙97号で既報の通り、ドイツ人と日本人を両親に持つ島田さん。授業では島田さんが英語とドイツ語による自己紹介を行い、スライドを使ってドイツの名所や文化について説明した。中学生は英語で質問をし、自分の出身地のおすすめのスポットなどを紹介。英語の実践と異文化理解を促す、楽しく貴重な交流時間となった。



生徒の感想

- ドイツの有名なスポーツや珍しいハリネズミの形をした料理などを知ることができた。
- 英語とドイツ語の発音の違いや本物のドイツ語の発音を学ぶことができた。
- 地元の名物津ぎょうぎを英語で紹介できたのが嬉しかった。前より英語を話すことができてよかった。
- 言語だけでなくドイツの文化を教えてもらったことで、より世界を広く感じた。

卒業式及び学位記・修了証書授与式の日程

皇學館中学校
3月19日(火) 10:00～ 中学セミナーホール
皇學館高等学校
3月1日(金) 10:30～ 記念講堂
皇學館大学
3月18日(月)
①神宮参拝 外宮表参道手水舎前集合 外宮参拝(教職員のみ御垣内参拝)の後、 内宮御垣内参拝 【文学部・文学研究科・専攻科】 (8:30集合) 8:30～10:50 【教育学部・現代日本社会学部・教育学研究科】 (8:40集合) 8:40～11:00
②学位記授与式 11:30～12:40 記念講堂
③教員免許状・階位証等交付 12:50～13:50 各教室
④祝賀会 14:00～15:30 総合体育館メインアリーナ
※保証人の皆様については大学内の教室において学位記授与式の様子を中継にてご覧いただけます。 文学部: 231教室、教育学部: 212・222教室、 現代日本社会学部: 431教室

オープンキャンパスの3/23+

さまざまなプログラムをご用意してお待ちしております。ぜひご来場ください。

開催時間	イベント名	学科・内容
12:00～13:00	受付	6号館にて受付
13:00～13:10	オープニング	スケジュール説明
13:10～13:40	大学説明	学部学科を中心に大学説明を行います。
14:00～14:15	学科・コース説明	神道学科 国文学科 国史学科 コミュニケーション学科
14:15～15:00	模擬講義	教育学科 現代日本社会学科
15:15～16:00	キャンパスツアー	自然豊かなキャンパスを学生スタッフがご案内します。
15:15～16:00	NIPPON発見ツアー	歴史や文化を感じるスポットをご案内します。
15:00～16:30	個別相談コーナー	入試、学科内容、資格等、ご相談ください。

上記のイベント・プログラムは、ご自由にご参加・ご観覧ください。

問合せ●皇學館大学 入試担当 TEL.0596-22-6316

ご案内

令和5年度 皇學館大学 伊勢志摩定住自立圏共生学教育プログラム学修成果発表会

—地域に活かす、私たちの力—

伊勢志摩定住自立圏を形成する3市5町の自治体と連携し、学生が地域住民の方々とともに地域の課題解決に取り組むアクティブ・シチズン育成のための教育プログラム。今回は1年間の総まとめとしてCLL活動報告及び「伊勢志摩定住自立圏共生学」副専攻履修者による卒業論文(研究)を中心とした地域課題学修の総括を発表します。一般の方も見学可能です。ぜひご来場ください。

2月29日(木) 13:30～17:00
皇學館大学 621教室
【事前申込制】 [参加申込はこちらから](#)

第1部 13:30～15:10
CLL活動報告会 一口頭発表の部—
選抜されたプロジェクトチームが令和5年度の1年間の活動をまとめ発表します。参加者投票によるオーディエンス賞の表彰を行います。

第2部 15:10～15:30
CLL活動報告会 —ポスターセッションの部—
ポスターセッションでの意見交換を通じ、学生・参加者間の交流を深めます。参加者投票によるポスター賞の表彰を行います。

第3部 15:30～16:30
地域志向研究発表会
学生各自の専門領域と圏域の課題を結び付けた学びの成果の発表を行います。

第4部 16:40～17:00 表彰式

問合せ●皇學館大学地域課題学修支援室
TEL.0596-22-8542 Email coc@kogakkan-u.ac.jp

皇學館高等学校・中学校 卒業生随想

この春、皇學館高等学校は307名、皇學館中学校は25名が卒業を迎える予定だ。彼らの胸に去来する思いを語ってもらった。

皇學館中学校

切磋琢磨できる仲間

3年A組 中山 湧斗



入学したての頃、学年通信の名称案に「一期一会」と書いたことを覚えています。あれから3年、笑顔で切磋琢磨できる級友達や、先輩・後輩との出会い、見守り導いてくださった先生方との毎日は、間違いなく充実感溢れるものになりました。切磋琢磨と言えば、何かを成し遂げようとしたときは一人で考え込まず、周りの人と話し合い、協力してこられたと思います。2年生の時に初挑戦した合唱コンクール。音程やリズムがうまく掴めず困っていたところ、同じパートの人が何度も一緒に練習し、助けてくれました。本番ではみんなが全力で歌い、見事金賞を受賞することができました。百人一首大会では先輩に大差で負けてしまい、以来、友達と百人一首をよくするようになりました。そして、百人一首が自分の好きなことにもなりました。そんな風に周りに自然な形で切磋琢磨できる人のいたことが、自分を成長させてくれたと思います。これからも周りの人への感謝を忘れず、前途洋々の大きな期待を持って過ごしていきたいと思っています。

勉強への向き合い方が身に付いた

3年A組 齋藤 華



私がこの3年間で最も有意義に思えたのは、「勉強への向き合い方」が身に付いたことです。「勉強は人並にできたらいい」くらいに思っていたのですが、この3年間を通してクラスの人々と切磋琢磨したことで、自分を高め、上を目指すようになりました。こんな意識が持てたことに、自分でも驚いています。このきっかけを作ってくれた先生は、どんな時でもしっかり私を見守り、後押しをしてくれました。私が、「精いっぱい時間を勉強に費やしても結果につながらない」と泣いた時も、自分の限界をまだ超えていないことに気付かせ、もっと伸びると奮い立たせてくださいました。「為せば成る」の言葉を胸に、目標に向かって頑張ります。そして努力の花が咲いたとき、真っ先にご報告したいと思っています。楽しみに待っていてください。必ず有言実行します。

中学校生活を生き生きと過ごせたのは、ご指導くださった先生方やいつもそばにいてくれた友達、級友、部活の先輩方や後輩たち、そして両親、家族のおかげです。この感謝を胸に、皇學館高等学校に進んでいきます。

贈る言葉

卒業おめでとう

3年A組担任 岩崎 真理

コロナ禍の緊張に包まれ、保護者様参加人数制限やアルコール消毒励行の中、全員マスクの出で立ちで入学式を迎えたのが昨日のように思い出されます。対面にはなかったものの、プラスチックボードを前にしての授業や、一斉に前を向いて黙食するお昼は実に気の滅入るものですが、それはそれとして素直に受け入れ、めげることなく明るく過ごす皆さんの様子に、幾たび心救われたことでしょうか。

みなさんは本当に素直で優しく、他人を思いやることのできる人たちでした。もちろん各々に個性豊かで、自己主張もはっきりしていて、時にはちょっと行き過ぎたの衝突を心配しましたが、そんな時でも私の話に耳を傾け、真剣に受けとめて、平和的な解決を導いてくれました。学習面の伸長はもちろんのこと、皇中祭などの学校行事や修学旅行等の事前学習には一丸となって取り組み、素晴らしい結果を残してくれました。「為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」と上杉鷹山の辞を借りての叱咤激励にも充分すぎるほどに答えてくれました。これからも、あなたたちの活躍を楽しみにさせていただきます。…幸せな担任より。

皇學館高等学校

失敗は成長への近道

3年4組 大津 拓己



中学生の時は何かに挑戦して失敗することに恐怖感があり何も挑戦してこなかったため、高校に入学したら自分がやりたいと思ったことは何でもチャレンジしてみようと考えました。そんな私がこの3年間で学んだことは、失敗は成長への近道だということです。校友会総務委員長に挑戦したときは失敗を繰り返しながらも多くの先生方や総務副委員長に支えられ、生徒に楽しんでもらえる企画をコロナ禍でも実行することができました。失敗は決して悪いことではありません。次同じことが起きた時にどうすればいいのか考えることができるからです。さらに、今はまだ私たちは学生です。幸い失敗したときにいっしょに考えてくれる大人の人や友人がたくさんいます。だから今のうちにいっぱい失敗して甘えてください。そうして今後その大人がいなくなった時に自分で考え行動できるようにいろんな経験をしてください。必ずその失敗した経験は皆さんの糧となります。最後にこの皇學館高等学校で皆と会えて本当によかった。ありがとう!

周りの支えは偉大

3年3組 田中 涼泉



私は中学生のころ、満身に勉強をすることができませんでした。そのため高校では勉強を頑張ろうと決め、皇學館高等学校に入学しました。小中学校は同じメンバーだったため友だちの作り方がわからなかった私は授業を通して仲良くなろうと思い、一緒に問題を解く、わからないところを教え合うということを積極的に行いました。一緒にテスト勉強をしたり、点数を競い合ったりすることもありました。結果、想像以上に仲良くなれました。私が在校生の皆さんに伝えたいことは、周りの支えは偉大だということです。人それぞれ得意なことや長所が異なります。何かに挑戦しようとして壁にぶつかったとき周りの人の力を借りることで、1人では難しかったこともできるようになるかもしれません。困ったときは頼ること、困っている人がいたら手を差し伸べることで自分の成長に繋がっていくと思います。私は周りに支えられていると実感できる高校生活でした。この出会いをこの先も大切にしたいです。3年間ありがとうございました。

贈る言葉 いつも心に思いやりと夢を

第3学年主任 上野 貴司

長かったような3年間の高校生活でしたが、過ぎ去ってみればあっという間だったかもしれませんね。コロナ禍が過ぎて従来の学校生活に戻ってきたちょうど過渡期の高校生活、戸惑うことも多かったと思います。そんな中でも皆さんはクラスマッチ、体育大会、皇高祭と学校行事にも積極的に参加して高校生活をいっそう充実したものにしようと創意工夫する姿を見せてくれました。級友にいろんなアイデアを出してクラス展示の準備を引っ張ってくれた人、出場種目の練習でみんなに一生懸命声をかけてモチベーションを高めてくれた人、などなど。多くの場面が思い出されます。

困難な期間を過ごしたからこそ互いに協力し合ったり支え合ったりすることの大切さを実感できたのではないのでしょうか。日頃の学校生活を通して各教科の知識はもちろんですが、周囲の人々への感謝の気持ちや思いやりの心など人として大切なことをたくさん学んでくれたと思います。

入学したての頃はまだ緊張や不安を抱いた表情でしたが、今は最上級生として後輩を牽引してくれるまで成長した姿が頼もしく見えます。この3年間の学びはかけがえのない大切なものになったと思います。それを糧にして、これからも謙虚に努力する気持ちを忘れずに、人としていっそう成長して自身の夢をぜひ叶えてください。卒業おめでとう。今後の活躍を期待しています。

アクティブ スチューデント Active Student

高い志とチャレンジ精神でもって学内のみならず、さまざまなフィールドで活躍している皇學館生たち。本コーナーでは彼らの熱い思いとともに、その活動ぶりをご紹介します。

古川陸弥^(教育3)さんが高校女子卓球部監督に 東海高校新人卓球大会三重県予選会学校対抗の部(女子)

古川陸弥さん(教育3)が自身の母校である県立名張青峰高等学校からの依頼を受け、11月18日に開催された「東海高校新人卓球大会三重県予選会学校対抗の部(女子)」において同校卓球部(女子)の監督を務めた。大会では1回戦で敗れたものの、「監督」という得難い経験の中で視野の広がりを実感したようだ。



引き受けるにあたり、部員に頼ってもらえる監督をめざしたと話す古川さん。信頼関係を築くためにもウォーミングアップから参加し、密なコミュニケーションを心掛けたという。苦労したのは「助言」。卓球の団体戦ではセット間と試合中にそれぞれ1分間しかタイムアウトを取れない。「私自身の選手経験から、複雑抽象的、冗長な内容は頭に入らず意味がないことを知っていたので、得点につながるアドバイスを一つに絞り、具体的かつ簡潔な言葉で伝えるようにしました」。また、監督経験を通して試合当日でも普段と同じことを行う大切さに気付いたと話す。「卓球は他のスポーツに比べ駆け引きや心理戦が多く、メンタルの安定は最重要事項。試合会場でもいつもと同じルーティンをすることで、練習通りのプレーを發揮してくれました」。俯瞰で捉える力が身に付いたとも語り、マクロの視点で得た気付きや課題を共有して、集団の活動レベルを上げられる人物になっていきたいと意欲を語った。

中学1年から卓球を始めた古川さん。選手としてはケガに気を付け、地元や県大会での入賞を、監督としては5月の三重県団体戦でベスト8以上に進むことが目標だ。二足の草鞋での活躍に期待がかかる。

小谷志代^(3年)さんが最優秀賞、 青木美心^(3年)さんが3席

第9回 東海地区高校生フォトコンテスト、 雑誌「CAPA」月例フォトコンテスト

皇學館高等学校写真部がまた快挙だ。第9回東海地区高校生フォトコンテストで応募総数541点のうち、最優秀賞3点のひとつに小谷志代さん(3年)の作品「愛」が選ばれた。審査委員長を務めた写真家の飯塚元彦さんは「顔に明るい光が射し、後ろ側が暗くなっていること



小谷さんの作品「愛」

で、これから希望がいっぱいあることが伝わる作品。母と子の優しい関係を作者がうまく撮っている。また、撮られている人と撮っている人が一体となっており、非常に感動しました。10年、20年と時が経過したときに当人たちがこの写真を見たら、きっと喜んでくれる」と高く評価した。

また、カメラ・写真雑誌「CAPA」の月例フォトコンテスト(2024・2月号)で青木美心さん(3年)の作品「新入生」が3席を受賞した。「何でもない日の教室のひとコマなのですが、とても目を引きました。凛とした真っ直ぐなポートレートはとても美しく、新入生の初々しさがまぶしく感じられます。彼女の成長を一緒に見守っていきたくなるような作品」と講評を受けた。



青木さんの作品「新入生」

「祭り笛を絶やしたくない」 松下恵吾^(神道2)さんが独学で笛師に

「笛がなくなってしまうと祭がなくなる」。強い危機感から、吹き手としてだけでなく、篠笛職人(笛師)になった松下恵吾さん(神道2)。学業の傍ら年間20本ほどを製作し販売するほか、これからの祭を担う若い世代に笛を持ってほしいと、祭に携わる高校生以下の人には無償で提供している。



篠笛に興味を持ったのは、小学4年生のときに、出身地である長野県飯田市の「遠山の霜月祭り」を見に行ったことがきっかけとなり、厳かな雰囲気を生み出す笛の音に魅せられた。中学1年生から独学で笛を製作し始め、今では全国各地から買い求められるまでに。一方で、「祭りの笛は本来地域の人が手作りしていたもので、その土地にしかない音でした。しかし、買うものになってしまったことで、古典調と呼ばれる型にはまった笛が変わってしまったケースが各地で見られます」と話し、「そうした中でも昔からの笛の音を守っている地域がある。そのような祭り笛を保存する活動ができれば」と熱く語る。

各地で伝統ある祭事が失われつつある現状については、「神事にしても神賑わい行事にしても、始めた人が必ずいて、強い思いを持っていたはず。やむ

製作期間は漆の硬化時間を含めるとおよそ1ヵ月。冬に採った竹を洗い、炭火で油抜きをした後、日光に数ヵ月当てて色を抜き、2、3年以上寝かせたことでようやく笛の材料となる

を得ない事情があるのは承知していますが、伝統が途切れてしまうのは先人に対する裏切りになりかねない」と懸念する。伝統を絶やさないために「意地でもやり続ける」とした上で、「祭や伝統は生きもの。本質を見極めながら、時代によって形を変えていくことが必要」と展望を語った。また、「漆を使うことによって漆産業の活性化に繋がる。子どもたちにとっても日本の伝統工芸を知る入口になる」と松下さん。篠笛の吹き手、作り手としての誇りを胸に、祭を支えていく決意は固い。

伊東亜里紗^(3年)さんの 読書感想文が県優秀賞受賞

第69回 青少年読書感想文三重県コンクール

皇學館中学校3年の伊東亜里紗さんが第69回青少年読書感想文コンクールで三重県優秀賞に輝いた。課題図書は『人がつくった川・荒川』。首都圏を貫く「荒ぶる川」荒川の歴史を紐解きながら、川への向き合い方を問うノンフィクションだ。伊東さんは本に挙げられたキーワード「利水」と「治水」を念頭に、「私たちは『川』というものから自然の力、怖さを学び、『川』を通して知恵を身につけてきた。(中略)『自然と人間の共生』という永遠のテーマにしっかりと正しい選択ができるよう、また自然と共榮していくことの出来る社会を考えていきたいと思う」と結んでいる。



「幼い頃は本を読むより話を作ることが好きだった」と伊東さん。受賞を受け、「嬉しい気持ちでいっぱい」と話す。また読書について、「本それぞれの魅力を見つける楽しさがある」と言い、「好きなジャンルに偏る傾向があったが、これからはさまざまな分野の本を読んでいきたい」と語った。

第69回(2023年) 青少年読書感想文全国コンクール《中学校の部》課題図書



『人がつくった川・荒川』 かつて、荒ぶる川=荒川の流れを変えることで江戸の繁栄はうみだされ、たび重なる洪水から人々を守ってきました。川の歴史と流域の暮らしの変化をいねいに追いかけてながら、地球温暖化が原因とされる近年の大規模な水害をどう防くかまで、荒川の過去・現在・未来を旅します。(出版社サイトより引用)